

あるジャーナリスト出身の外交評論家が、こんなエッセイを書いていました。「ある人がスイカ畑を持っていた。非常に甘くて人気のあるスイカ。ところが、毎晩誰かが盗んで行くので、彼は一計を案じて看板を立てた。『この中に1個、毒入りスイカあり』。『青酸カリ入りスイカ1個、一口食べたら即死』みたいな看板。外からは見分けがつかない。どれか分からない。脅しの看板を立てた事によって、翌日調べたら、見事に全く取られていない。脅しが効いた。知恵の勝利だ。そして、ふと看板を見たら、文が付け加えられている。『今は2個』。毒入りスイカが2個だと。つまり、自分は相手を脅かして、もう退散させたと思っていたが、犯人は上手で、どれが毒入りか分からないから全部出荷できなくなった。何と嫌らしい話か。殺伐としたストーリーか。でも、これが世界ですよ」という要旨でした。

今(2017. 9)、北朝鮮がミサイル撃ったり核実験やると言ったり、トランプは「ロケットマン」と言ったり、色んな事をやっていますね。ある国は持っていない兵器を「持っているんだぞ」と脅し、別の国は持っても「持っている」と言わない事によって無言の圧力を掛ける。また、脅す事によって相手を黙らせるつもりが、窮鼠猫を噛むで、余りにも追い詰め過ぎて逆襲を受ける国もある。そして、本気で脅しているのに本気だとは思われないで、避ける事ができたはずの戦争が偶発的に起こって、大変な事になってしまうという事もある。「だから、外交・際評論というのは難しいのだ」と、自分が判断を誤った事の言い訳のエッセイです。

歴史はどこに転がっていくか分からない面があります。なので、今の事ではなくて10年後・20年後・100年後・まして1000年後の事を正確に、前もって語っていく事は誰にもできません。でも、「100年後・1000年後・2000年後、こうなるのだ」と書いてある書物があり、その言葉の通りに実現しているものがあるとしたら、何を置いてもその書物に目を通すべきです。それがバイブル。聖書の言葉。聖書の言葉が信頼に値する一つの根拠として、この世界を造った創造主が、私たちに聖書預言を提供しているのです。

今日は、聖書預言から世界を考えていきたいのですが、今までの**聖書の真実シリーズ**は古代を集中的にやって来ましたね。「マンダネ」覚えてる？ 誰も分からない。ペルシャのキュロス王のお母さん。色んな事を話してきましたが、今日は現代に焦点を当てます。これはある意味、楽です。資料満載で手に入り易いから。イエス・キリストの終末預言の中から、第一次世界大戦を預言していたキリストの言葉を通して、世界がどこに向かって行っているのかを一緒に見ていきましょう。

イエスが十字架にかかる数日前、もう数日後には十字架にかかるという状況で語った言葉の記録です。**マタイ 24:1** **イエスが宮を出て行かれると、弟子たちが近寄って来て、イエスに向かって宮の建物を指し示した。**

宮とはエルサレムにあった非常に豪華絢爛な神殿。そこを出て行かれた時、イエスは少し寂しそうな、悲しそうな顔をしていたに違いないと思います。イエスがこの宮を出るのはこれが最後だから。次にイエスがエルサレムに戻って来るのは十字架にかけられる時。神殿を出ながら、自分が救い主だと気がつかないユダヤ人の行く末を思って、寂しそうな顔だったと思います。ところが、一緒にいた弟子たちはウキウキ・ワクワク、お上りさん状態。彼らの殆どはガリラヤ出身でした。

エルサレム神殿は、ガリラヤでは絶対に見る事ができない巨大建造物で、建てられ始めたのが BC20 年。この記事は AD30 年。50 年かかって、まだ現在進行形中の建物。完成は AD64 年。だからあと 34 年、ずっと工事が続きます。ものすごく豪華な、当時、世界 7 不思議の一つと言われた大きな神殿。今もエルサレムの地下トンネルをずっと行くと、この神殿の第一段目の、イエス・キリスト時代の石を触る事ができます。その重さは 570 トン。紀元前に持ち込まれた 570 トンの石。

大阪城で一番でかい石は 107 トン。大阪城の石、どうやって運ばれたか知っていますか？ 107 トン、重いよ。何と、巨石の下に昆布、敷いたんですって。地面にも昆布を敷いた。そのヌメヌメによって、ニョロニョロと押して行った。昆布は、髪の毛の事だけじゃない。

今の大阪市は大阪湾を埋め立てているので、大阪城は大阪湾からは見えません。でも、豊臣秀吉の時代、大阪城は大阪湾の目の前にあり、湾に入って最初に目に飛び込んでくる建造物は大阪城でした。しかし、エルサレムは標高 800m。その高さに 570 トンの石をどうやって持ち上げますか？ 紀元前に。未だに分かりません。それを見事に建て上げた建築の天才ヘロデ王の大神殿を見て、彼らは「スゴイ！」

マタイ 24:2 **すると、イエスは弟子たちに言われた。「あなたがたはこれらの物すべてを見ているのですか。まことに、あなたがたに言います。ここで、どの石も崩されずに、ほかの石の上に残ることは決してありません。」**

「あなた方がビクともしない建造物として見上げているこの神殿は、石が全部取り外されてバラバラになり、跡形もなくなります。」「そんなバカな！」と思った事でしょう。だけど、イエスが言った事で実現しなかったのは今まで一回もないので、弟子たちはとても胸騒ぎがしたに違いありません。

マタイ 24:3 **イエスがオリーブ山で座っておられると、弟子たちがひそかにみもとに来て言った。「お話しください。いつ、そのようなことが起こるのですか。あなたが来られ、世が終わる時のしるしは、どのようなものですか。」**

神殿が崩壊するのはいつでしょう？ イエスが再臨する時や、世が終わる時には、どんな前兆があるのでしょうか？ ①神殿崩壊はいつで、どんな前兆がありますか？ ②イエスが再び来るのはいつで、どんな前兆がありますか？ ③世の終わりはいつで、どんな前兆がありますか？

今日は、③**世の終わり**についてお話します。世はギリシャ語で確か「アイオーン」だと思いますが、「時代」という意味です。聖書の歴史観で世界を見るならば、時代は 2 つに分ける事ができます。AD と BC ではないですよ。「今のこの世」と「次に来る世」。「今のこの世」とは人間が人間を支配する時代。今の時代。しかし、これはずっと永久に続くのではなく、ある時終わります。終わらされます。そして、救い主（メシア）キリストが人を統治する時代・「次に来る世」となります。これが「メシア的王国」または「千年王国」。

しかし、千年王国に行く前に、これを何としてでも実現させたくない勢力が抵抗する。この勢力を完全に一掃するために、7 年間のとんでもなくひどい時代「患難時代」があって、この 7 年間に全世界の全人類の少なくとも 75% が死に絶えます。今まで人類が生きて来た歴史上、最もひどい苦痛の時代。患難時代に入る前には前兆があり、いくつかの事が起こらないと患難時代は始まりません。その前兆について、聖書のあちこちで預言しているのですが、今日読むところもその内の 1 つです。

まず、**患難時代の前兆ではない事**から説明しましょう。

マタイ 24:4-5 **そこでイエスは彼らに答えられた。「人に惑わされないように気をつけなさい。わたしの名を名乗る者が大勢現れ、『私こそキリストだ』と言って、多くの人を惑わします。」**

偽メシア、ニセ救い主が出て来ます。人類史上、最初に「自分が救い主だ」と言ったのはイエス・キリストです。彼以前にはいません。キリストが初めてそう言いました。

ところが、この後いつの時代にも「私こそキリストだ」と言う偽メシアがたくさん出てきます。有名な統一教会、文鮮明（ぶんせんめい/1920-2012）もそう。統一教会は今名前を変えていて、統一家庭連合。パッケージを変えても中身は一緒。これは危ないですよ。絶対、近寄らないで下さい。このように自称メシアがあちこち出て来ます。これは、患難時代の前兆ではなくて、いつの時代にも起こる事です。

マタイ 24:6 また、戦争や戦争のうわさを聞くことにはなりますが、気をつけて、うろたえないようにしなさい。そういうことは必ず起こりますが、まだ終わりではありません。

今まで歴史の中で記録されている戦争は約 15,000。2017 年 9 月 28 日現在でも、34 の戦争が起こっているそうです。いつでも、どこかで。創造主から離れて私利私欲を追求する人間は、戦争を避ける事ができない。これは、いつの時代にもある事です。

しかし、ここからは**患難時代の前兆**です。

マタイ 24:7 民族は民族に、国は国に敵対して立ち上がり、あちこちで飢饉と地震が起こります。

ここに 3 つ挙がっています。

① **あちこちで飢饉**；飢饉は食糧難。原因は異常気象。世の終わりになると、異常気象が通常になる。異常というのは、常と異なっているから異常です。でも常が異常だから、それが正常か異常か、もうよく分からない。今年（2017 年）1 月・2 月は**大寒波**でした。ヨーロッパもロシアも。テムズ川は完全に氷結。イギリスやフランスでは 12 時間に 12 万発の落雷。パキスタンは 53.5℃。南半球オーストラリアでは真夏の 40℃の日が 3 日続いた後に降雪。昨年、サハラ砂漠には、観測史上初めて雪が降った。

時々テレビに出ているイギリスのノーザンなんとか大学のザッコバという博士は、「今、地球は温暖化と言われているが、2030 年をピークに、太陽活動が非常に低くなるのでミニ氷河期に入る。」

1645 年から 1715 年の 70 年間、太陽活動がすごく弱くなったので、地球の平均温度が 1.5 度下がり、この時、江戸時代の 4 大凶作、寛永・享保・天明・天保の飢饉が起こりました。彼は、それとよく似た状況がこれから起こると言っています。それが本当か私には分かりませんが、食糧の事で言えば、温暖化の方が寒冷化よりもはるかにいいそうです。いずれにしても異常気象。

② **あちこちで地震**；マグニチュード 7 以上の巨大地震の発生。1980 年-1989 年は 2 回、1990 年-1999 年は 10 回、2000 年-2009 年は 20 回、2010 年-2017 年は 82 回。この内の 1 回が 2011 年の東日本大震災でマグニチュード 9。マグニチュード 10 になったら 9 の 32 倍です。マグニチュード 9 では、地震発生から津波が来るまで 1 時間。10 になると、揺れている最中に津波が来ると言われています。

日本は 4 つのプレートの上に乗っかっているのだから、備えなさいと言うけど、どう備えたらいいのか？準備する事は大事ですが、これが意味しているのは、世の終わりが近いという事。**飢饉・地震**は「何か変だなあ」ではなく、神が全人類に与えている警告なのです。

③ **民族は民族に、国は国に敵対して立ち上がる**；これは戦争の事。

24:6 戦争や戦争のうわさを聞くことにはなりますが、まだ終わりではありませんと、どこが違うのか。

24:7 の戦争は、ヘブライ的な言い回しで世界的戦争の事です。この節の欄外の * に「**2 歴代誌 15:6、イザヤ 19:2**」とあって、同じような使い方をしており、これは世界全体を巻き込む戦争を指しています。

民族は民族に、国は国に敵対して立ち上がるというのは、全世界的な大戦・世界中を巻き込む戦争が起こるという事。これが起こらないと患難時代は来ません。

世界大戦は、20世紀に入って2回起こりました。1回目は第一次世界大戦（1914.7.28 - 1918.11.11）。その当時、世界には50の国があり、31か国が戦争に参加し、19か国は中立を保ちました。これを詳しく調べると、「こんな大戦争になるとは誰も思ってもみなかった」という事が分かります。今まで通り地域戦争・紛争止まりで終わると思っていたんです。そしたら、あれよあれよと言う間に、日本も含めて世界中が巻き込まれ、4年間続いて、2000万人の人間が亡くなるという大戦争になりました。そうして、この世界大戦が今の世界の土台になって、今の歴史の流れを決定づけたのです。

今日は、第一次世界大戦から3つの事を見ます。

ポイント① 歴史は人間が作るものではあるが、人間の意思を越えた結果に転がって行く。

第一次世界大戦のきっかけはオーストリアです。首都はウィーン。今のウィーンは堺市の半分ほどの大きさです。が、第一次世界大戦前までは10倍以上あり、ヨーロッパの主要都市の1つでした。

そのオーストリアに、フランツ・ヨーゼフ（1830-1916/在位 1848-1916）という皇帝がいました。彼は18歳で皇帝になりますが、王権神授説を信じていて、頭が固くて伝統主義者。ハプスブルグ家が世界で一番だと思込んでいて、改革が大嫌い。とにかく頑固オヤジの皇帝です。改革しないので、オーストリアは色々失敗を重ねていき、周りともイザコザがあって、戦争にも負けたりしましたが、まだまだ強い皇帝。

彼にはルドルフ（1858-1889）という息子がいるのですが、父親の固い考えが嫌いで嫌でたまらない。それで、父親のする事に全部反対します。ルドルフの奥さんは父親が連れて来たけど、「親父が連れて来た女性なんか要らんわ!」父親に内緒でローマ法王に離婚状を送って、「もう、別れましたから。」オーストリアの天敵であるロシアやフランスと内密に文書を取り交わして、父親の顔に泥を塗ったり。とにかく息子ルドルフは、フランツ親父が大っ嫌い。

ところがある時、事件が起こりました。ルドルフが愛人と一緒に、別荘で変死体で発見されたのです。彼は唯一の皇太子。オーストリアの次の皇帝。その皇太子ともあろう人が全裸で、不倫相手とベッドの中で見つかった事は、余りにも恥かしい事。なので、心臓麻痺という事にしてもみ消しました。

しかし問題は、ルドルフは一人息子だったので跡取りがない。そのためフランツは、自分の弟カールの息子フェルディナント（1864-1914/在位 1896-1914）に白羽の矢を立てます。彼が皇太子になるという事は、ゆくゆくは次の皇帝。ウィーン社交界の貴族の若い娘たちが色めきだって、彼と結婚したら妃になれるという事で、猛烈にアタックしまくり。

しかし、誰が来ても、フェルディナントはにべもなく断りました。意中の女性がいたからです。彼女はお城に勤務している召使い。それが分かった時、フランツは「アホか!」。召使いといっても家柄はしっかりしていて、伯爵の娘でゾフィーという名前。だけど、チェック人。チェック人はオーストリアに支配された民族で、オーストリアの中では2級市民で差別されていた。「美しい女性は他にもたくさんいるのに、なぜゾフィーなんだ!? 別れろ! 私が紹介する!」とフランツが言うのですが、「絶対に、この女性でないと結婚しない!」

そこで、フランツは条件をつけます。「おまえは皇太子ではなく、皇位継承者と名乗れ。ゾフィーは皇位継承者の妻とする。彼女はチェック人なので、たとえ皇帝の妻となっても、ロイヤルファミリーの特権は全て許さない。宮中での行事の時は彼の隣に座ってはならない。一番下座に座れ。

生まれた子供は、オーストリア帝国の跡継ぎにはなれない。この条件を呑め！嫌なら結婚を諦めろ！」
フェルディナントは呑みません。なぜかというと、結婚した時フランツは 70 歳。という事は、先が長くない。早く死ぬだろうと思ったのです。ところが、この人は死にません。14 年経っても死なない。「憎まれっ子、世にはばかる」みたいな。

この条件でゾフィーは宮中に入ったのですが、嫁いびりがメチャクチャひどい。ここまでやるかというくらい、ひどい扱いを受け続ける。フェルディナントは「もう少し待ってくれ。もう少ししたら亡くなるから」。でも、ますます元気なフランツ。

そうこうしている内に、フェルディナントにボスニア・ヘルツェゴビナの首都サラエボでの、オーストリア軍の軍事演習を視察するという仕事が入りました。それが 1914 年 6 月 28 日。これは二人の結婚記念日。14 年前に結婚した日。「ゾフィーを 1 人にするのは忍びない。一緒にサラエボに連れて行こう。」
ウィーンにいたらフランツがいじめるけど、サラエボまで行ったら大丈夫という事で、ゾフィーを無理に誘います。彼女は何か嫌な予感がするのですが、夫が言うから行きました。

なぜ嫌な予感がしたのか？ この時のバルカン半島は世界の火薬庫と言われていたのです。ロシア民族はスラブ系。バルカン半島には、北からスラブ人が下りて来て住んでいました。ロシア語（スラブ言語）で、「南」をユーゴ、「スラブ人の国」をスラビアと言います。ユーゴスラビアは南スラブ人の国という意味。

スラブ人がバルカン半島に住んだ時、半島の北部はクロアチア・南部はセルビア。両方ともスラブ人で民族系統は同じ。だけど、クロアチアはカトリック、背後にオーストリア。セルビアはギリシャ正教、背後にロシア。ここはオーストリアとロシアの代理戦争をやっていて、同じ民族であるにも拘らず非常に仲が悪い。この 2 つの国の真ん中にあっただのがボスニア・ヘルツェゴビナ。めちゃくちゃ仲悪い。いつ紛争が起こるか分からないという所にフェルディナントは行きます。

ところで、セルビアには 1 年に 1 回、民族主義が燃え上がる日があって、それは 6 月 15 日。500 年以上前に、オスマン帝国 (1299-1923) に敗北して潰されてしまった日。だから 6 月 15 日は国恥記念日で、「我々ももう一度立ち上がるんだ！」と叫ぶような日。特にトラブルや衝突が多い日。
でも、フェルディナントが行くのは 6 月 28 日なので、問題なしと思われました。

ところが、オーストリアのカレンダーはグレゴリウス暦。補正が少ない。一方、セルビアはギリシャ正教なのでユリウス暦。この 2 つのカレンダーには 13 日間のズレがある。という事で、フェルディナントには 28 日でも、セルビア人には 15 日。「わざわざこの日に軍隊を視察して、パレードやって見せつけるのか！」それで、彼が来た時にやろうという事で、7 人の暗殺者が配置されるのです。

フェルディナントは「警護が甘すぎる」と言われますが、皆に歓迎してもらいたくて、幌付きのオープンカーで駅から市庁舎まで行きました。その時、19 歳の少年が爆弾を投げた。バーン！と爆発したけど、少年は走って逃げたので、成功したかどうか見てません。実は幌に当たって跳ね返り、別の所で爆発していたので、随行員が負傷したけど夫妻は無傷。

フェルディナントは午後のスケジュールを全部キャンセルし、随行員の見舞いに病院に行くのですが、運転手が道に迷ってしまい、バックするために一旦止まります。そこに別の暗殺者が現れ、車に足を掛けて、ゾフィーのお腹を撃ちました。彼女のお腹には赤ちゃんがいて、フェルディナントはその懐妊を非常に喜んでいたのですが、お腹を撃たれ、彼自身も首を撃たれて 2 人は死んだのです。

それを聞いたオーストリアのフランツ・ヨーゼフは、セルビアに対して「戦争をする!」。オーストリアの上にはドイツ帝国がいます。彼は自分の軍事力だけではそれほど強くないので、ドイツ帝国に「セルビアに対して最後通告を送って戦争しようと思うのですが、皇帝様の意向を先ず伺いたいと存じます」と親書を送りました。

この時のドイツ皇帝はヴィルヘルム 2 世 (1859-1941/在位 1888-1918) で、ドイツの歴代皇帝の中で最も無能と言われている人。彼は親書が届いた時、バルト海でヨットのクルージング中でした。重大な親書が届いたという事で、すぐにベルリンに戻りますが、よく考えずに「戦争、ええやん」。次の日、すぐにバルト海に行って、またクルージング、3 週間。彼は早くヨットに乗りたかった。「もう、ええやん。」この時の決断で、ヨーロッパが 4 年間戦争まみれになって、ドイツ帝国は 4 年後消滅。

その時にアドバイスする人はいなかったのか? 総理大臣は休暇中、外務大臣は新婚旅行中でした。ドイツの OK が出たという事で、フランツはセルビアに、絶対に呑めないような条件をいっぱい出して、「1 つでも呑めないと言ったら戦争だ! 回答期限は 48 時間!」セルビアは自分だけでは勝てないし、バックにドイツがいるから余計に勝てません。

その時点で、セルビアが SOS を送った国が 3 つありました。

① 同じスラブ民族のロシア。その時の皇帝はニコライ 2 世 (1868-1918/在位 1894-1917)。しかし、彼は返事をしませんでした。嫌とは言わず、だけど OK とも言わない。でも、返事をしないというのは断っているという事。実は、ロシアは 10 年前に大戦争をして敗北していたのです。

ロシアが負けた戦争って何ですか? 日露戦争ですよ。我らのじいさんたちがロシアと戦って勝った。すごいと思いませんか? 『坂の上の雲』。日露戦争の結果、ロシアが持っていたバルチック艦隊と太平洋艦隊は全滅。陸軍も崩壊。威信は地に落ち、ガタガタで暴動騒ぎが頻発。今は国民を食わせる事を一生懸命しないといけない時。出費のかさむ戦争はできません。

もう一つ、ニコライ 2 世はある事で、政権の中でも、宮廷の中でも信用を失っていました。彼は日露戦争の 1904 年に息子アレクセイを授かりましたが、生まれながら血友病という血液が固まらない病気で内出血だらけ。脳内出血もしばしば起こる。長くは生きられないだろう。

その時この 1904 年に、サンクトペテルブルクに 1 人の男が現れます。ラスプーチン (1869-1916)。この得体の知れない男は、会う人会う人の病気を次々治していくのです。「もう医者から見放されてダメだ。」「では、私が祈禱してあげよう。」そして不思議と癒される。

その噂がクレムリンにまで届き、皇后は藁にも縋る思いで「息子アレクセイのために祈って下さい!」ラスプーチンが祈ったら劇的に改善した。それを見た皇后は全面的に信用してしまい、彼女を後ろ盾にしたラスプーチンは、クレムリンの中で貴婦人たちをレイプしまくるんです。放蕩三昧、やってはならない事を片端からやる。だけど、皇后が「大目に見て上げて」と言うので、誰も彼を止める事ができない。

しかし、自分の妻を寝取られた人たちが怒って、「ラスプーチンを殺してやる!」と、彼が食べる料理に致死量の 200 倍の青酸カリを入れました。彼は「うまい!」と食べて、何の異変もない。次に、ピストルで 4 発撃ちました。死なない。そこで、鉄の柱でめった打ち・袋叩きにして、頭蓋骨陥没・眼球は飛び出る。死なない。化け物だという事で、す巻きにして、凍結しかかっているネヴァ川に放り込んでようやく殺した。これがラスプーチン。

ラスプーチンがメチャクチャしている時、ニコライ 2 世は止めなかったので、部下たちからもすっかり見放されているという状況でした。だから、たとえオーストリアがセルビアと戦争しても世界大戦にはならない。ロシアが入って来ないから大丈夫。地域紛争で終わると。

因みに、今のプーチン大統領の本名はラスプーチンです。が、これは余りにも悪いイメージなので、おじいさんの時に改名しました。それでプーチン。

②イギリス。イギリスは 18-19 世紀には世界に冠たる大英帝国で、7 つの海を支配すると言われた強大な国でした。産業革命を一足先に成し遂げたから。その海軍力を使ってインド・東南アジア・アフリカを植民地にし、中国にはアヘンを売りつけて半植民地化し、彼らのタダ同然の労働力を使って綿花を栽培させ、それをタダ同然で輸入。産業革命で造った繊維・織物の機械で製品を作り、世界中で儲けていました。

ドイツは植民地を持っていません。でも、それが良かったんですね。植民地に安い原料を出してもらわずに他の道に行こうという事で、イギリスが繊維業に行っている時に重化学工業に進んだんです。重化学工業と繊維だったらどちらが儲かりますか？ もちろん重化学工業です。ドイツが鉄や機械や化学工業で作った物をイギリスが買う。結局イギリスは、ドイツから買うために一生懸命働いているようなもの。

第一次世界大戦の前に、ドイツはイギリスをはるかに上回る経済力を持ちつつありました。もしドイツと戦争するなら、挟み撃ちにしないと勝てません。ドイツの東にはロシア、西にはフランスやイギリス。この両方から攻めて行ったら勝てるかもしれないけど、ロシアが参加しないのなら、イギリス VS ドイツでは分が悪い。そこで、イギリスはセルビアに伝えました。「オーストリアの最後通告をさっさと受け入れるように。私たちは中立を守って参加しない。」

③フランス。フランスはドイツが大っ嫌い。フランスとドイツの間にアルザス・ロレーヌ地方があるのですが、それをドイツに取られていたから、ドイツが大っ嫌い。でも、イギリスと一緒にないと戦えないので、「イギリスが中立を守るのなら、私たちも参戦しない。」

つまり、世界大戦にはならない。みんな戦いたくないという状態。それを読んでいたからこそ、フランスは吹っかけて行ったわけです。

ところが、いよいよセルビアに攻め入る 3 日前に、突然、ロシアのニコライが「やっば、やる！」えっ?! この間まで返事しなかったのに。ラスプーチンがいたり、国の中がゴタゴタで、それどころじゃないって。しかし、ロシアの内務大臣がニコライに耳打ちしたんです。「陛下。国の中ゴタゴタで戦争する力がない。それは違う。だからこそ、戦争しましょう！今、国民はバラバラだけど、外に強敵が出て来て戦うとなったら一致団結しますよ」。それで立ち上がった。バラバラだったロシア国民の心が、ピシャッと一つになりました。

それを見て、イギリスが「うちもやる!」。イギリスを見て、フランスが「モチロンうちもやる!」。ふと気がつくと、ドイツは東はロシア・西はイギリスとフランスに囲まれていた。

歴史は人間が作るものですが、これらの事は、人間の思惑をはるかに超えています。1 人の助言で、戦争ができない理由が戦争をするべき理由に転換してしまい、一気に世界大戦に走って行ったのです。

ポイント② 民族は民族に、国は国に敵対して立ち上がり

第一次世界大戦は史上初の民族戦争。人類が経験して来たそれまでの戦争とは全く異質の戦争です。19世紀までの戦争は、基本的に国王のため・貴族のため・領主のための戦争なので、軍人は国王の王族及び家来たちだけで、一般庶民は兵士になりませんでした。戦争の受益者も国王か貴族で、一般市民は勝っても負けても、特に生活は変わりません。だから戦争が起こっても、王家に雇われて訓練されたプロの兵たちが戦うのであって、自分の息子が戦争に取られる心配はなく、自分たちとは関係ない。深刻な関心を持たない。これが19世紀までの戦争でした。

近世に入ると、徐々に民族意識が育って来て、国民の中の民族意識をくすぐってやると、民間人を兵士として徴用でき、そうすれば急速に兵力を増大できる事が分かりました。しかも「王のためではなく、民族のために戦うのだ」と民族意識に訴えるなら非常に強いという事も。

戊辰戦争みたいなものです。江戸時代に武士階級と威張っていた侍が、町民たちで構成された兵士と戦ってボロ負けした。

というわけで、これに味を占めて、それまでの王国のための戦争が民族の戦争になり、国家総動員体制で戦う戦争に変わりました。国家の戦争・民族の戦争に変わったのは、第一次世界大戦からです。

ポイント③ 第一次世界大戦が生み出した3つのもの

* **ソ連** ; オーストリアの上にドイツ・その右にロシア・左にフランス・海を挟んでイギリス。ドイツとオーストリアは、左右から挟み撃ちにされたらたまったものじゃない。それで、何とかこの劣勢を挽回するために、まずロシアを黙らせようと色々働くのですが、1つ切り札がありました。

ロシアは戦争中に「パンよこせ運動」があったり、余りにも長すぎて利益がない戦争という事で、兵士の中からも反乱者が出て、遂に戦争中に革命が起こります。しかし、新しい政府も戦争続行の考え。今まではロシア皇帝のためだったのが、正式にロシア国民のためだという事で戦争が続くのです。

何とかしたいと思っていた矢先、ドイツの諜報部に1人の人物が接触を図りました。その人は、スイスに亡命していたレーニン(1870-1924)。「私はロシアではお尋ね者なので、帰ったら捕まって共産主義者という事で処刑される。だから、ドイツ諜報部の力でペトログラード(現サンクトペテルブルク)まで送り届けてくれないか? もし無事に送り届けてくれたら、沈下した革命をもう一度吹き返して、共産革命を起こして、戦争を止めさせてみせるから。そのチャンスをくれ。」

ドイツ諜報部はその時まで、レーニンなんて聞いた事がなかった。胡散臭い話だと思うのですが、ドイツも追い詰められていました。彼をただ送るだけでいいなら、失敗しても痛くも痒くもない。それでドイツの力で、誰も詮索する事も乗り込む事もできない完全密封・封印列車が仕立て上げられ、ペトログラードまで送って行きました。

着いてすぐ、レーニンは「四月テーゼ」を発表し、一旦落ち込んでいた革命機運を盛り立てて10月革命を成し、ロシアを倒してソ連にします。そして、約束通り戦争を止めました。

もし、あの時のレーニンの申し出をドイツが却下していたら、ロシアはソ連になっていません。ロシアがソ連になったのは、追い詰められたドイツが、レーニンを守ってロシアに送ったからです。ソ連は20世紀に入って、米ソ冷戦で世界を東西に分け、共産主義の雄として70年以上君臨しました。アジアでも共産革命を次々やって、中国が共産化したのも、北朝鮮が共産化しているのもソ連です。金日成を連れて来たのはソ連です。北朝鮮を造ったのはソ連ですよ。中国ではない。この元を辿っていくとどこに行くか? 第一次世界大戦でドイツがした、その選択なのです。

* **アメリカの台頭** ; 第一次世界大戦は3国同盟 VS 3国協商とあって、4つの大国と色んな国々が戦いました。同盟は条約文があつて、協商は口頭の場合が多いのですが、どちらにしても同じです。勝ち組に乗れという事で、たくさんの国が3国協商の方にぶら下がっていき、2つのグループが4年3ヵ月にわたって長い戦争をして、協商の方が勝利しました。

でも、本当の勝者はどちらでもなく、アメリカだったのです。それまでの戦争は、兵器のエネルギー源は全部石炭でした。第一次世界大戦で初めて石油が使われ、同盟も協商も両方共が石油をアメリカから買いました。それで長い戦争の間、ヨーロッパの富は、アメリカの石油を買うために全部流れて行きます。戦争終結時、一応勝者と敗者に別れましたが、勝った方も貧乏のどん底で、富は丸々アメリカに移って行ったのです。すなわち第一次世界大戦は、世界の覇権がヨーロッパからアメリカに移るといふ戦争でした。現在も、力を落としたと言われているけど、それでもアメリカの政治力・発言力は頭抜けています。そのスタートは第一次世界大戦です。

* **イスラエル建国の導火線** ; これが、一番決定的な事です。第一次世界大戦で、ドイツ側についたオスマン帝国（トルコ）。オスマン帝国は中東一帯を領土にしている国で、そのトップは親ドイツ派。しかし、この戦争が始まった時は、どう見てもドイツが不利。するとドイツが催促して、「お宅とウチは、戦争の時はウチに付くという秘密条約を結んでいるよね。それなのに、なぜいつまでも黙っているの？早くドイツ側に付くって言えよ!」。だけど、「今ドイツに付いたらまずいんちゃうか？ 負けるんちゃうか？ どうしよう…」と煮え切らない。本音は中立でいたい。ドイツはどんどんダメになっていて、ドイツに付いたらエライ事になるというのが見えている。

その時、ドイツは力技を出すのです。ドイツは最新鋭の戦艦を黒海に入れます。そのためには、ボスポラス海峡を通らなければなりません。そこを管理しているのはトルコ。秘密条約を盾に、ドイツの戦艦がボスポラス海峡を無理に通りました。

それでイギリスが怒って、「お宅、ドイツと通じてるんか?! それならウチはお宅をたたくぞ!」オスマン帝国は苦し紛れにウソをついてしまいます。「あの2隻の戦艦はドイツの物のように見えて、実はトルコの物です。ウチがドイツから買ったんです。塗装が間に合わなかったから、ドイツに見えるかも分かりませんが、あれはトルコの物なんです。自分の海軍を、自分が管理している海峡を通らせて悪いという事はないでしょう!」

ところが、この2隻の最新鋭艦は、クリミア半島のロシアの黒海艦隊の基地を激しく攻撃し始めました。これは、トルコの手がロシアを攻撃した事になる。それで「オマエ、やったな!」と戦争に入ってしまった。つまり、オスマン帝国は本意じゃないのに、巻き込まれて同盟側に入ってしまったのです。

こんな事って、ありますか?! いくつか調べたけど、大体このような事でした。オスマン帝国が同盟軍に入って敗北したために、彼らが支配していた中東パレスチナ地域の支配権がなくなって、イギリスが委任統治領として管理する事になりました。そしてイギリスは、そのパレスチナに「ユダヤ人国家を造る」と約束したのです。もしオスマン帝国が同盟軍に加わっていなかったら、イスラエル建国の道筋は立たなかったという事です。

戦争後、講和会議を開く時、普通は戦勝国と敗戦国が戦勝国のある町に集まって、交渉しながら講和のための条件を決めます。日露戦争では、日本とロシアが講和条約を結ぶ時、ロシアが負けを認めず来日しないので、アメリカのポーツマスで両国が話し合っ講和内容を決めたからポーツマス条約。

ロシアは頑固で、負けたのに日本に賠償金を一銭も払ってない。それは、日本がこれ以上戦争する体力がないという事を見透かしていたから。だから「賠償金無し!」という事で手打ちをしたのですが、日本国民は非常に怒って、小村寿太郎（こむら じゅたろう）をものすごくなじりました。

それはそうとしてドイツは、戦後、ベルサイユ条約という本当に無茶苦茶のひどい制裁を受けます。ベルサイユ条約は、敗戦国は全く呼ばれずに戦勝国だけが集まり、要求を全部決めて、一方的に「これを呑め!」という講和条約で、その内容は余りにも苛酷なもの。特にフランスは、ドイツに前の戦争で負けているので復讐心に燃え、とんでもない賠償金を命令しました。第一次世界大戦の賠償金をドイツがフランスに支払い終えたのは、つい最近、多分2-3年前ですよ。

こうして悲惨な扱いを受け、大戦後の苦しみの中にいるドイツの人々に、ある噂が広まります。「我々ドイツ軍は、前線に於いては負ける事は少なかった」。確かにそうです。ドイツ軍は非常に健闘しました。しかし、戦術の失敗は戦略で補えるのですが、戦略の失敗を戦術で補う事はできません。ドイツは細かい戦闘では勝ちますが、大きな戦略が間違っているために勝てなかったのです。

「我々は前線では殆ど負けなかったのに、戦争に負けたのはなぜなのか? おかしいじゃないか。」「負けたのは国内の共産主義者・平和主義者・何よりもユダヤ人が裏切って、我々を背中から切り付けて行ったからだ。」「ユダヤ人は、我々の情報を相手に流していたんだ」。自分たちの失敗の理由を、ユダヤ人になすりつけるようになったんです。

ヨーロッパには昔から、戦争の勝敗と民族の優劣を結び付けて解釈する考えがあります。「戦争に勝った民族は強くて賢くて優秀。負けた民族は劣っている」。その考えで第一次世界大戦を解釈したら、「ドイツは負けたから、ドイツ民族は劣っている」という事になり、絶対に認められない。なので、尤もらしい理由を捏ね上げる必要があります、でっち上げの標的でスケープゴートになったのがユダヤ人でした。それで、「ユダヤ人陰謀論」というのが第一次世界大戦の後に出て来るのですが、それを真に受けた1人がヒトラーです。

ドイツには弾薬を作るためのチリ硝石がないので輸入しなければなりません。しかし、イギリスが海上封鎖しているため、武器製造の原材料がドイツに入って来ない。だから弾切れになるはずなのに、一向にそうなりません。それは、ハーバーという科学者が、空気から弾薬を作ったからです。空気は80%窒素。窒素はN₂ですが、原子に分けるのには非常な力が要ります。でも、ある化学反応・触媒反応を使うとアンモニアにする事ができる。そうしたら窒素を取り出す事ができ、それで、空気から無尽蔵に弾薬を作れるようになったんです。この科学者はユダヤ人でした。

第一次世界大戦で、最も多くの死傷者を出した部隊はドイツ系ユダヤ人部隊でした。その理由は、自分たちがドイツ人だという事を認めてもらうためには、普通のドイツ人以上に、ドイツに対する愛国心を示す必要があったからです。一番過酷な所に、自ら率先して突っ込んで行く。

ところが、「我々はドイツを裏切るのではなく、貢献している事を知ってもらい、仲間である事を認めてもらうために全力を尽くしたのに、ユダヤ人がいたから負けたとされた。」「どんなにその国のために貢献しても、我々はその国の一員になる事は不可能なんだ。」「自分の国を持たない限り、本当の安全はないんだ」。この考えは、第一次世界大戦でもたらされました。この事によって、イスラエル建国の導火線に火が点いたと言えます。

第二次世界大戦は、第一次世界大戦の延長に過ぎません。

さて次に起こる事は、この 24 章には出て来ませんが、イエスがまた来るという事です。これを「携挙」と言って、患難時代の前に携挙があります。携挙がいつ起こるか、誰も知りません。いつでも起こり得ますが、はっきりしているのは、患難時代の前に起こるという事。なぜ明確にそう言えるのかは、次回ゆっくり見たいと思います。

いずれにしても、終わりの時代の大きなしるしである世界大戦は、既に実際に起こりました。その事を覚え、聖書にある救済のメッセージを是非知って、受け入れて頂きたいと思います。

この間、新聞で読んだのですが、夏休みに両親と帰省していた男の子が魚を釣って帰って来ました。お母さんが「この魚、どこで釣って来たん？ 何ていう池？」「そんなん、池の名前とか知らんわ。でも『べからず』って書いてある所で釣って来た。」「それはね、『魚、釣るべからず』と言って、釣ったらダメっていう意味。」「えっ！ 釣ったらあかんの?!」

彼は「べからず」という言葉を読む事はできた。だけど、それが「ダメだ」という意味が分からなかった。

聖書は日本語に翻訳されているから読めます。しかし、書かれている事の意味を知るためには、解説や解き明かしが必要なのです。そのために、努めていきたいと願っています。

聖書の中には本当の答えがあります。是非、聖書を通して救い主と出会って下さいますように。心からお勧めします。



Figure 1

フランツ・ヨーゼフ I 世



Figure 2

ルドルフ皇太子



Figure 3

フェルディナント大公
ゾフィー、子供たち



Figure 4

ヴィルヘルム 2 世



Figure 5

ニコライ 2 世



Figure 6

ラスプーチン



Figure 7

レーニン

Figure 1-7 : Wikipedia

* 動画は「[HCA 東住吉キリスト集会](#)」で検索。ぜひ見て下さい。

* ラジオ番組「[聖書と福音](#)」(15 分) も是非どうぞ。スマホでいつでも聞けます。YouTube もあります。

動画筆記 : Rumi

